

新型コロナ感染拡大状況における 高齢者の孤立予防を目的としたコミュニティカフェの特性

村社卓*

要旨：社会状況の変化にもかかわらず、高齢者が社会とのつながりを失わない取り組みの推進が期待されている。本研究の目的は、新型コロナ感染拡大状況における高齢者の孤立予防を目的としたコミュニティカフェの特性を明らかにすることである。研究方法は定性的（質的）研究方法である。調査方法は参与観察とインタビューである。分析には定性的コーディングを用いた。分析の結果、高齢者の利用要因と利用に伴う変化は「安心の獲得」「たのしさの共有」、参加する住民ボランティアの継続要因は「たのしさへの共感と支持」「業務遂行の組織化」、そして、高齢者に参加とサービス利用を促す相互関係は「活動を継続できる関係」「期待される機能を維持できる関係」として明らかにされた。このことから、「カフェ」の今日的特性は、「期待される機能を維持できる関係のなかでの、参加者によるたのしさへの共感と支持の展開」と定義できた。

キーワード：新型コロナ感染、高齢者の孤立予防、コミュニティカフェ、たのしくつながる、定性的研究方法

I 問題設定

1. 研究背景

社会状況の変化にもかかわらず、地域社会からの孤立防止のため、高齢者が社会とのつながりを失わない取り組みの推進が期待されている。新型コロナ感染拡大の影響は、高齢者の孤立予防活動にも多大な影響を与えた。体力の低下、話す機会の減少などにより、高齢者においても、身体活動量の低下、交流機会の減少が見られ、認知機能の低下等が懸念されている（厚生労働省 2021：15）。施設や機関でも、感染拡大の恐れからデイサービスが十分に実施されていない。このように、高齢者には、介護保険サービスの利用控えが見られ、ADLや認知機能の低下、家族の介護負担の増加が指摘されている（厚生労働省 2021：19）。一方、高齢者だけでなくボランティア活動にも影響がみられる（寺村ら 2022）。国際的にも、ボランティア活動への参加が減少している（内閣府 2021：67）。このような新型コロナ感染拡大状況のなかで、孤独・孤立対策の推進が一層求められ、つながることの重要性が再認識されている（厚生労働省 2021：177-180）。

2. 研究目的

本研究では、新型コロナ感染拡大状況における高齢者の孤立予防を目的としたコミュニティカフェ¹⁾について検討する。具体的には、新型コロナ感染拡大状況以前にまとめられた研究成果と比較検討することで、高齢者の孤立予防を目的としたコミュニティカフェの今日的特性を明らかにするものである。

3. 先行研究

新型コロナ感染拡大状況において、その影響を踏まえたソーシャルワーク実践に関する研究は、各領域でようやく「現場報告」というかたちで始まっている。例えば、高齢者領域では、「高齢者の社会活動の実態」(寺村ら 2022)、「地域高齢者のフレイル予防」(小林 2022)に関する研究、ボランティア領域では、「食支援ボランティア活動」(黒田ら 2022)に関する研究である。しかし、高齢者の孤立予防に関わるボランティアおよびコミュニティカフェに関する研究はほとんどみられない。

これまででも、高齢者の孤立予防に関する研究は数多く取り組まれてきた。例えば、高齢者の孤立予防を目的としたコミュニティカフェに関する研究に

* 岡山県立大学保健福祉学部

〒719-1197 岡山県総社市窪木111

は、「地域の高齢者の参加要因と参加に伴う変化」(村社 2018)、「ボランティアの参加要因と継続要因」(村社 2019)、「参加を促す関係とサービス利用を促す関係」(村社 2020a)、「社会的孤立と認知症の予防」(村社 2020b)、「高齢者の居場所」(川口 2020) に関する研究、がある。

4. 研究意義

本研究の意義は、新型コロナウイルス感染拡大状況における「高齢者の孤立予防を目的としたコミュニティカフェ」(以下「カフェ」と省略)の特性について、それまでの研究成果との比較検討を通して、実証的、構造的に明らかにするところにある。新型コロナウイルス感染拡大状況において、住民ボランティアを中心とした「カフェ」の継続は容易ではない。活動の継続には、複数の要因が推察できる。この間、「カフェ」の機能について、定性的データを用いた実証的研究は十分に組み込まれていない。本研究の成果は、高齢者の孤立予防活動だけでなく、「介護予防・日常生活支援総合事業」での「通所型サービスB」における住民ボランティアの主体的活動の推進にも貢献するものである。

Ⅲ 研究方法

本研究では、研究方法として定性的(質的)研究方法を用いた。

1. 調査概要

調査対象は大都市A区の「カフェ」である。「カフェ」の目的は「高齢者、介護者の孤立予防、区民相互の支え合いの活性化」である。対象者は「一人暮らし高齢者、認知症高齢者、介護者」である。「カフェ」は2009年から順次、B～Gの6地区(8

カ所)で開催されている。表1は、全8カ所の「カフェ」の現在の概要である。

B地区の場合、開催は3カ所の団地集会所で月4回(「カフェ1」のみ2回)である。時間は13時から14時半の90分である。参加費は200円である。参加者にはお茶と簡単なお菓子が提供される。「カフェ」の運営メンバーはスタッフと住民ボランティアである。スタッフはNPO法人職員と医療専門職ボランティアである。その他、地域包括支援センターの職員も毎回30分程度参加している。NPO法人職員の主な役割は、福祉関係者への対応、住民ボランティアのサポートである。医療専門職ボランティアは保健師と看護師である。主な役割は血圧測定と健康相談対応である。住民ボランティアはA区の住民で、全員が女性である。主な役割は、会場設営、お茶出し、話し相手である。

なお、表1の8つの「カフェ」は新型コロナウイルス感染拡大により、すべてが中止に追い込まれた。そのうち、「カフェ1-3」がいち早く活動を再開している。3つの「カフェ」はB地区にあり、住民ボランティアを減らしながらも時間を短縮(120分から90分)するなどして、活動している。本研究ではこの3つの「カフェ」に焦点を当てて調査を実施している。

2. 調査方法

調査方法は参与観察とインタビューである。B地区での参与観察は、「カフェ」再開後の2021年10月から2022年8月まで調査者が単独で実施した(「カフェ1」は12回、「カフェ2」は2回、「カフェ3」は3回)。参与観察の主な対象者は「カフェ」の利用者、住民ボランティア、スタッフである。利用者の平均人数は、「カフェ1」が22.4名(男性の割

表1 A区における「カフェ」の概要

名称	地区	開催日	運営主体	開催状況
カフェ1	B地区	毎月第1/3木曜日	ボランティアグループ	再開後、開催中
カフェ2	B地区	毎月第1土曜日	ボランティアグループ	再開後、開催中
カフェ3	B地区	毎月第4水曜日	ボランティアグループ	再開後、開催中
カフェ4	C地区	毎月第2木曜日	ボランティアグループ	2022年3月で終了
カフェ5	D地区	毎週木曜日	福祉施設	休止中
カフェ6	E地区	毎月第3月曜日	福祉施設	休止中
カフェ7	F地区	毎月第2金曜日	福祉施設	休止中
カフェ8	G地区	毎週土曜日	個人	休止中

(2022年8月1日現在)

している。利用者は自分で健康を守っている。健康に関する話題には敏感である。「うつったらカフェに参加できないよ」と言っている。健康相談の利用は相変わらず多い。相談時間は長くなっている。「話を聞いてくれる人がいない」から、「ひとり暮らし」だから、「カフェ」は健康を維持できる機会として評価されている。一方、感染が怖くて「カフェ」に参加できなくなった利用者もいる。

2) たのしさの共有

「カフェ」を利用した結果、高齢者はたのしさを共有できる。{たのしさの共有}は、[笑える][歌える][体を動かせる][一緒にできる]の4つのコードから生成された。

(1) 笑える

高齢者は笑えるので「カフェ」を利用している。「カフェ」では開催中、多くの利用者が笑っている。「カフェ」では笑いが目立つようになった。多くの利用者が一緒に笑いようになった。クイズで、歌で、体操で笑うようになった。多くの場面で利用者の笑いが見られる。利用者は「夫婦二人だけだと、家でこんなに笑うことはないもんね」と語る。利用者は「ここがたのしいから来る」「来るのはほんとは疲れたけどたのしいから来た」のである。

(2) 歌える

高齢者は歌えるので「カフェ」を利用している。歌の時間は利用者全員が歌っている。以前は歌わない人もいた。普段、声を出していないことが不安になっている。デイサービスもお休みのところが多い。「カフェ」では、歌は一番人気のあるプログラムである。利用者は歌うことをとても楽しみにしている。歌詞カードが配布され、生演奏だとさらに盛り上がる。大声を出すことは禁じられていても、利用者はこの時間を楽しんでいる。

(3) 体を動かせる

高齢者は体を動かせるので「カフェ」を利用している。利用者は全員が体操に参加している。以前は体操をしない人も多かった。利用者は、運動が不足していることを気にしている。体を動かさないことが不安になっている。体操も人気のあるプログラムである。体操ではDVDの活用も行われている。そして、医療専門職ボランティアによる対面指導ならば、さらに気持ちよく体を動かすことができる。利用者は無理をしない。周りも強要しない。

(4) 一緒にできる

高齢者は一緒にできるので「カフェ」を利用している。利用者は一緒にできることをたのしんでいる。「一緒に」が「カフェ」の一番の変化である。以前は、自分のペースで利用者が「それぞれ」の時間をたのしんでいた。現在では皆が「一緒に」たのしむようになった。歌の時間、体操の時間、利用者は全員参加している。そして、住民ボランティアも一緒に参加している。立場に関係なく、全員で一緒にたのしむようになっている。

2. 参加する住民ボランティアの継続要因

住民ボランティアの「カフェ」の継続要因は{たのしさへの共感と支持}{業務遂行の組織化}と表現できる。

1) たのしさへの共感と支持

住民ボランティアは、たのしさに共感することができ、さらに支持してもらえるので「カフェ」への参加が継続している。{たのしさへの共感と支持}は、[共感してもらえる][成果として現れる][さらに改善できる]の3つのコードから生成された。

(1) 共感してもらえる

住民ボランティアは共感してもらえるから「カフェ」に参加している。「カフェ」では住民ボランティアの目標が明確になっている。住民ボランティアは、安全面での制約がありつつも、「こんな時だからこそできるだけを続けたい」と思っている。「こんな時だからがんばる」のであり、「人の役に立ちたいと思うようになった」と心境の変化を語っている。「カフェ」ではたのしさに共感してもらえる。相手のたのしさへの共感と支持が見られる。

(2) 成果として現れる

住民ボランティアは成果として現れるから「カフェ」に参加している。住民ボランティアは参加者数が気になる。会計の黒字を喜んでいる。「もっと来てほしい」と思っている。「参加者が増える方法を教えてほしい」と区にも要望している。参加しなくなった人の家には、手書きのチラシを配布している。その結果、利用者が増え、それを成果として喜んでいる。参加者数以外には、成果として、利用者からの反応にもこだわっている。

(3) さらに改善できる

住民ボランティアはさらに改善できるから「カフェ」に参加している。「カフェ」では、住民ボラ

ンティアはコーヒーの味、プログラム内容など継続的に改良している。歌にはクイズを取り入れている。紙に歌詞を書き、絵を描くなど、自分の担当する活動を工夫している。活動内容を見直しするため、アドバイスを求めるようになってきている。助言を受け入れている。メンバーに注文も出している。改善のためには、厳しいことが言えるようになってきている。

2) 業務遂行の組織化

住民ボランティアは、業務の遂行が組織化されているので「カフェ」への参加が継続している。「業務遂行の組織化」は、「役割を明確にする」「メンバーを限定する」「健康を管理する」の3つのコードから生成された。

(1) 役割を明確にする

住民ボランティアは役割を明確にするから参加が継続している。基本的に仕事の内容は変わっていない。そして、感染防止のため、開催時間短縮のため、メンバー減少のため、役割分担を徹底している。作業がシステム化している。その結果、「カフェ」は少人数でも運営できることが明らかになった。また、短時間でも評価が高いことが分かった。役割を明確にすることで、少ないメンバーでも同じ効果が得られることが分かった。

(2) メンバーを限定する

住民ボランティアはメンバーを限定するから参加が継続している。住民ボランティアが減少している。「カフェ1」でも、5人から3人に減っている。補強の意識はあっても実現していない。「カフェ」では住民ボランティアが固定化している。ベテランのメンバーだけが残っている。気の合うメンバーで構成されている。「自分たちは自分たちのやれることをするだけ」「ボランティアだから、自分のやりたいことをすればよい」と考えている。

(3) 健康を管理する

住民ボランティアは健康を管理するから参加が継続している。メンバーの間で予防意識はさらに高まっている。除菌への認識が高まり、徹底が進んでいる。陽性患者、濃厚接触者が出た場合など、活動を自ら自粛している。加えて、自らの健康管理も進めている。健康面での助け合いが盛んである。ミーティングの時間、食事の時間、振り返りの時間で、常に健康情報を交換している。人にうつせない立場

にあるため、積極的に健康管理している。

3. 高齢者に参加とサービス利用を促す相互関係

高齢者に「カフェ」への参加を促す関係は「活動を継続できる関係」、サービス利用を促す関係は「期待される機能を維持できる関係」と表現できる。

1) 活動を継続できる関係

高齢者に「カフェ」への参加を促す関係は「活動を継続できる関係」である。「活動を継続できる関係」は、「安全対策を徹底できる」「見直しを協議できる」「たのしさを共有できる」の3つのコードから生成された。

(1) 安全対策を徹底できる

スタッフと利用者は安全対策を徹底できる関係にある。安全対策の徹底は「カフェ」開催に不可欠である。「カフェ」では、自主的な判断により「時間の制限」「接触の制限」「感染予防の徹底」が図られている。そうしないと、「カフェ」に集会所を貸している自治会の理解と許可が得られない。スタッフは、「定期的な換気」「小まめな消毒」を常に利用者にアピールしている。利用者もマスクを着用する、間隔を空けるなどルールに従っている。

(2) 見直しを協議できる

スタッフと住民ボランティアは見直しを協議できる関係にある。現在、「カフェ」の継続が最優先されている。これまで、スタッフは活動面での締め付けを避けてきた。しかし今回、歌の時間の短縮など、見直しを必要とする場面も出てきている。スタッフは「私たちはプロではない」「責任問題が発生したらしんどい」と訴える。しかし、締め付けすぎると「何も無理してまですることはしない」と思う。見直しの提案は難しい。両者の協議が大切になる。

(3) たのしさを共有できる

住民ボランティアと利用者はたのしさを共有できる関係にある。住民ボランティアは「カフェ」での活動を、「私の仕事」「幸せな時間」と思っている。住民ボランティアは利用者となのしさを共有することで、「元気をもらえる」「ご褒美がもらえる」のである。利用者も共有できると思っている。「来なきゃ、一日中テレビだもんね」と述べている。たのしさを共有するためには、住民ボランティアと利用者、両者による共感と支持が必要になる。

2) 期待される機能を維持できる関係

高齢者にサービス利用を促す関係は「期待される機能を維持できる関係」である。「期待される機能を維持できる関係」は、「情報を収集・提供できる」「対応を依頼できる」「必要に応じてつながる」の3つのコードから生成された。

(1) 情報を収集・提供できる

スタッフと利用者は情報を収集・提供できる関係にある。現在、住民への「戸別訪問」は原則禁止されている。そのため、参加しなくなった利用者の情報収集は困難である。収集したい場合、別の利用者に協力してもらうことになる。「カフェ」のおかげで、利用者の仲間の情報も収集できる。また「カフェ」では、様々な健康情報が提供されている。参加できていない利用者には、これも利用者の協力を得て情報が提供されている。

(2) 対応を依頼できる

スタッフと地域包括支援センターは対応を依頼できる関係にある。毎回30分程度、地域包括支援センターの職員が1名、「カフェ」に参加する。スタッフは気になる利用者をセンター職員に紹介している。センター側では「カフェ」に来ると無理なく情報を収集できる。ここでは普段耳に入らない情報が入る。長年の実績で信頼関係ができていたのでそれも可能となる。「カフェ」の役割は変わらない。スタッフは長年の実績を誇らしげに思っている。

(3) 必要に応じてつながる

地域包括支援センターと利用者は必要に応じてつながる関係にある。「カフェ」に参加している利用者は基本的に健康である。地域包括支援センターは利用者を必要に応じて、福祉関連サービス機関へつなぐ役割を維持している。利用者の要望に応じて、「医療機関を紹介する」「制度を調べる」「本人に代わって連絡を取る」のである。利用者にとっても、身近な仲間や住民ボランティアを通して、必要に応じてサービスを利用できる関係である。

4. まとめ

以上のことから、本研究により、新型コロナウイルス感染拡大状況における「カフェ」の特性は、次のように整理できた。高齢者の「カフェ」の利用要因は「安心の獲得」であり、利用に伴う変化は「たのしさの共有」である。住民ボランティアの「カフェ」の継続要因は「たのしさへの共感と支持」「業務遂行の組

織化」である。そして、高齢者に「カフェ」への参加を促す相互関係は「活動を継続できる関係」であり、必要に応じてサービス利用を促す関係は「期待される機能を維持できる関係」である。

V 考察

本研究では「研究結果」で示したように、新型コロナウイルス感染拡大状況における「カフェ」の特性について、①高齢者の利用要因と利用に伴う変化、②参加する住民ボランティアの継続要因、③高齢者に参加とサービス利用を促す相互関係、の3つの視点から定性的データを用いて、実証的、構造的に明らかにしている。この点が本研究の第1の成果である。

考察ではさらに、本研究の成果について、新型コロナウイルス感染拡大状況以前に明らかにされた先行研究(村社2018;村社2019;村社2020a)と比較検討することで、新型コロナウイルス感染拡大状況における「カフェ」の今日的特性を明らかにする。

1. 高齢者の利用要因と利用に伴う変化の特性

高齢者の利用要因は「安心の獲得」である。前回の成果(村社2019)と比較するならば、前回明らかにされた「入りやすい」「信用できる」「安心できる」は、利用要因として変わることはなかった。今回は「要求が満たされる」の部分に、「苦労を分かち合える」と「安否を確認できる」が新たに加わった。その他、「健康を維持できる」もその重要性が今回改めて確認された。

そして、「カフェ」利用に伴う高齢者の変化は「たのしさの共有」である。これも、前回の成果(村社2019)と比較するならば、前回明らかにされた「参加が楽しくなる」「緩くつながり続ける」という変化は今回も変わることはなかった。今回は、特に「笑える」「歌える」「体を動かせる」など、あまり注目されなかった特徴が評価された。そして、今回は「一緒にできる」といった、「一緒に」たのしんでいる状況が変化として確認された。

2. 参加する住民ボランティアの継続要因の特性

参加する住民ボランティアの継続要因は「たのしさへの共感と支持」「業務遂行の組織化」である。前回の成果(村社2018)と比較するならば、「たのしさへの共感と支持」については、前回明らかにされた「双方向の体験」「活動への没頭」「意欲的な試み」

は今回も変わることはなかった。今回は「共感してもらえ」「成果として現れる」「さらに改善できる」など、住民ボランティアのたのしさが共感され支持されていることを確認できた。

そして、「業務遂行の組織化」については、これも、前回の成果（村社2018）と比較するならば、前回明らかにされた「無理のない姿勢」「活動での気軽さ」「自己管理による改善」は、今回住民ボランティアの減少からその姿勢の維持に厳しさが見て取れた。つまり、「無理のない姿勢」については、各人の負担増加のため「役割を明確にする」対応が求められた。また「活動での気軽さ」についても、活動のやり易さを可能にするため、「メンバーを限定する」ことが求められた。そして、「自己管理による改善」についても、住民ボランティアにはさらに「健康を管理する」必要が求められている。

3. 高齢者に参加とサービス利用を促す相互関係の特性

高齢者に「カフェ」への参加を促す関係は「活動を継続できる関係」である。前回の成果（村社2020a）と比較するならば、前回明らかにされた「たのしめる関係」「離れられる関係」「安心できる関係」は、今回も「参加を促す関係」として確認された。今回はさらに、「安全対策を徹底できる」「見直しを協議できる」「たのしさを共有できる」関係として、状況に対して慎重に対応しつつ、参加を促している関係が確認できた。

そして、高齢者にサービス利用を促す関係は「期待される機能を維持できる関係」である。これも、前回の成果（村社2020a）と比較するならば、前回明らかにされた「つなげる関係」「依頼できる関係」

は今回も確認することができた。スタッフと地域包括支援センターは「対応を依頼できる」関係を、地域包括支援センターと利用者は「必要に応じてつながる」関係を維持できている。また、「戸別訪問」が困難な状況では、スタッフと利用者には、「情報を収集・提供できる」関係の維持が求められているのである。

4. 新型コロナウイルス感染拡大状況における高齢者の孤立予防を目的としたコミュニティカフェの特性

以上の考察から、新型コロナウイルス感染拡大状況における「カフェ」の特性は、特に「高齢者に参加とサービス利用を促す相互関係」に注目するならば、「期待される機能を維持できる関係のなかでの、参加者によるたのしさを共有の展開」と定義できた。図1と図2は、その内容を図解したものである。

図1の「期待される機能を維持できる関係」は、「カフェの利用者」「カフェのスタッフ」「地域包括支援センター」の3者から構成されている、この関係は利用者にサービス利用を促す関係である。また、「つなぐ」ことが優位となる関係でもある。図1では、利用者とスタッフは「情報を収集・提供できる」、スタッフと地域包括支援センターは「対応を依頼できる」、そして、地域包括支援センターと利用者は「必要に応じてつながる」が、関係特性として示されている。このように、利用者は、これまでと同様に、スタッフの対応依頼により、地域包括支援センターと「必要に応じてつながる」ことができるのである。

一方、図2の「活動を継続できる関係」は、「カフェの利用者」「カフェの住民ボランティア」「カフェのスタッフ」の3者から構成されている、これは利

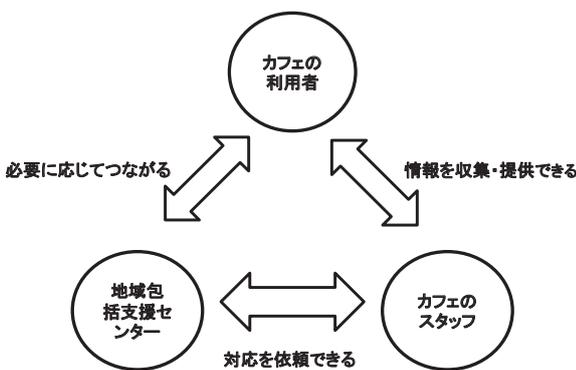


図1 期待される機能を維持できる関係とその内容

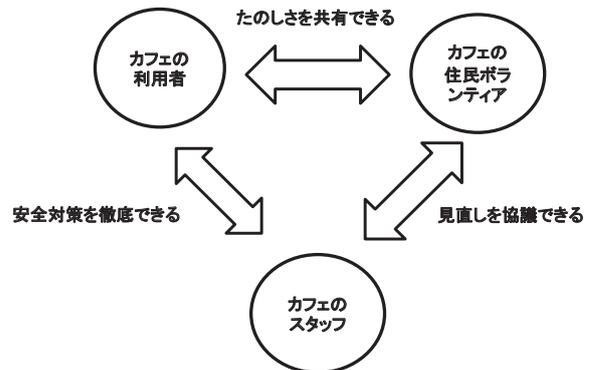


図2 活動を継続できる関係とその内容

用者に「カフェ」への参加を促す関係である。また、「たのしむ」ことが優位となる関係でもある。図2では、スタッフと利用者は「安全対策を徹底できる」、利用者とボランティアは「たのしさを共有できる」、そして、ボランティアとスタッフは「見直しを協議できる」が、関係特性として示されている。このなかでは「たのしさを共有できる」関係が重要である。この関係は、住民ボランティアと利用者が、相手のたのしさへの共感と支持を通して初めて可能になるのである。

VI おわりに

本研究では、新型コロナ感染拡大状況における「カフェ」の特性について明らかにしている。しかし、2022年8月現在においても、新型コロナ感染状況の拡大は収まっていない。したがって、今回の研究成果がその目的に対して、妥当性を有するものなのかどうか？今後も調査を継続することで、研究成果のさらなる検証が課題となる。

そして、新型コロナ感染拡大状況の進展に関わらず、「カフェ」は常に変化している。「カフェ」に参加する利用者と住民ボランティアは、加齢に代表されるように変化するのである。「カフェ」では亡くなる利用者、辞める住民ボランティアも多い。利用者、住民ボランティア、スタッフ、地域包括支援センターから構成される相互関係は常に変容するのである。したがって、新型コロナ感染拡大状況による変化と、加齢や疾病に伴う関係者の変化について、それを厳密に区別することは困難である。これが本研究における限界である。

しかし、このような課題や限界はあるものの、本研究では、調査方法として参与観察とインタビューを採用し、両方法の長所を意図的に併用することで、新型コロナ感染拡大状況における「カフェ」の特性について、実証的、構造的に明らかにする試みを概ね達成できたように思われる。

注

1) コミュニティカフェの定義は、「地域社会の中で『たまり場』『居場所』になっているところの総称」(長寿社会文化協会2007)をはじめ、多く存在している。本研究では、「飲食を共にすることを基本に。誰もがいつでも気軽に立ち寄り、自由に過ごすことができる場所」(倉持2014:30)の意味

で用いている。

2) 文中の { } はカテゴリを示している。

3) 文中の [] はコードを示している。

文献

長寿社会文化協会編 (2007)『コミュニティカフェをつくろう』学陽書房。

川口容子 (2020)「高齢者の居場所としてのコミュニティカフェの意義と期待－利用者・ボランティア・代表者の3つの視点から」『老年精神医学雑誌』31:291-303.

小林浩治 (2022)「新型コロナウイルス感染症(COVID-19)影響下の自粛生活を送る地域高齢者のフレイル予防自主プログラムの取り組み」『目白大学健康科学研究』15:91-102.

厚生労働省編『令和3年版 厚生労働白書』日経印刷。

倉持香苗 (2014)『コミュニティカフェと地域福祉－支えあう関係を構築するソーシャルワーク実践』明石書店。

黒田 藍・村山洋史・黒谷佳代・ほか「新型コロナウイルス感染症流行初期における食支援ボランティア活動の記述－活動プロセスの明確化と住民への効果の予備的検証」『日本公衛誌』69(4):284-296.

村社 卓 (2018)「高齢者の孤立予防を目的としたコミュニティカフェに参加する住民ボランティアの継続特性－ボランティアの『楽しさ』に焦点を当てた定性的データ分析」『社会福祉学』58(4):32-45.

村社 卓 (2019)「大都市における高齢者の孤立予防を目的としたコミュニティカフェの特性－利用要因および利用に伴う変化に焦点をあてて」『社会福祉学』60(2):78-90.

村社 卓 (2020a)『たのしくつながる高齢者の孤立予防モデル－参加とサービス利用を促す関係づくり』川島書店。

村社 卓 (2020b)「コミュニティカフェによる社会的孤立と認知症の予防」『精神臨床医学』49(5):651-655.

内閣府編『令和3年版 高齢社会白書』サンワ。

寺村 晃・濱田光佑・岡山友哉・ほか (2022)「新型コロナウイルス感染症拡大下における高齢者の社会活動の実態－通所型サービス利用者を対象とした質的研究から」『未来共創』9:97-121.

Features of Community Cafes Set Up to Prevent Isolation among Senior Citizens during the COVID-19 Pandemic

TAKASHI MURAKOSO*

Abstract : As a society, we expect efforts to be made to ensure that senior citizens do not lose their societal connections despite changes in the social situation. This study aims to clarify the features of community cafes set up to prevent isolation among senior citizens during the COVID-19 pandemic. The study adopted a qualitative research method and used participant observation and interviews as survey methods. Qualitative coding was used for analysis, revealing the following: “to gain peace of mind” and “to share the enjoyment” were reasons and outcomes cited for senior citizens to use community cafes; “empathy with and support for enjoyment for senior citizens” and “organizing the performance of tasks” were the reasons for locals to continue volunteering at said cafes; the types of mutual relationships that encourage senior citizens to participate and use services are “relationships that allow senior citizens to continue to engage in their activities” and “relationships that enable senior citizens to continue playing their expected roles.” From these findings, the study defined the features of contemporary social cafes as developing empathy with and support for senior citizens’ enjoyment within the context of relationships that enable them to continue playing their expected roles.

Keywords : COVID-19, prevention of isolation in senior citizens, community cafes, fun networking, qualitative research method